

英語授業での発音カタカナ表記に関する考察：カナ／英文字混合表記システムの提案 Considerations on katakana notation of English pronunciation in Japanese EFL classes: A proposal of a katakana-alphameric combinatory system

静 哲人

SHIZUKA Tetsuhito

Abstract

It is obviously impossible to accurately transcribe English sounds using Japanese kana. Nonetheless, occasional kana transcription of English words will never disappear from classrooms for Japanese EFL beginners, for a good reason. Kana is often the only practical means for teachers to communicate, in print, to learners the acoustic images of English words. This paper proposes a better method of using kana for that purpose: using them selectively in combination with Roman letters. Unlike the International Phonetic Alphabet, the proposed katakana-alphameric combinatory system will impose no additional burden on the learners and is expected to enable them to produce more target-like sounds than conventional kana transcription systems are.

目次

1. はじめに 2. 背景と先行の表記システム 2.1 カタカナ表記の広がり 2.2 なぜカタカナを用い発音記号を用いないか 2.3 カタカナ表記の巧拙 2.4 望ましいカタカナ表記のための原則 2.5 ヴィスタ方式と改定ヴィスタ方式 2.6 カタカナ表記自体の限界と英文字併用の可能性 2.7 著者自身のカタカナ利用表記の変遷 3. カナ／英文字混合表記システム試案 3.1 子音 3.2 母音 4. おわりに

1. はじめに

言うまでもなく英語の発音の正確な表記には国際音標文字が必要であり、日本語のカナを用いて正確に表記することは到底できない。一方、学校英語教育の現場では一定の割合でカタカナによる発音表記が行われている。カタカナ表記についての異論がなくなることはないだろうが、後述する理由により、教育現場でのカタカナ表記の利用がなくなることにもまたないと考えられる。ただし一口にカタカナ表記と言ってもその実情はさまざまである。もしカタカナを利用するならばより「良い」表記によることが望ましいのは言うまでもない。本稿は教室での使用を前提とした一つのカナ／英文字混合表記システムの試案を提示することを目的とする。

2. 背景と先行の表記システム

2.1 カタカナ表記の広がり

図1は2020年度にある教育実習生が用いたプリントの一部である。教科書の本文を音読用に転記したもののだが、一部の単語の発音をカタカナ表記しているのが見える。この実習生を大学で指導したのは筆者であるが、このカタカナ表記は筆者の指導によるものではない。かといって純粋に実習生本人によるアイディアではなく、担当指導教員の普段の実践の延長か、少なくともそれとの齟齬はないものだと考えられる。すなわち当該指導教員は普段からカタカナ表記を利用している可能性が高い。



図1 2020年度公立中学校で教育実習生が使用したプリントの一部

英語発音表記でのカタカナの使用はとくに中学校レベルでは珍しくない。まず中学生が教科書の新出単語の下に発音をカタカナで書きとめるのはよく行われている（小菅，2003，p. 71）。次に教科書ガイドのすべてにおいてカタカナ表記が使用されている（河内山・有本，2017）。そして辞書においてもカタカナ表記は使用されている。2003年時点では中学生用を謳ったものを中心におよそ20種類の英和辞典に発音のカタカナ表記が採用されていた（小菅，2003）。2021年4月、筆者が東京都内のある大型書店で実踏調査したところ、「中学生用」と銘打った英和辞書は少なくとも12種類、「小学生用」と謳った英和辞書は少なくとも9種類販売されていたが、その21種類すべてにおいて発音にはカタカナ表記が使用されていた。さらに中学生用のなかの2点では箱の帯において特に「カナ発音」を強調していた。これは「カタカナ表記付きであること」がセールスポイントになる、つまり学習者からのニーズがあることの証左である。すなわち中学生そして小学生対象の検定教科書以外の英語教材において、発音のカタカナ表記は例外ではなくむしろ標準的な方式であると言える。

2.2 なぜカタカナを用い、発音記号を用いないか

生徒が発音を書くときなぜカタカナを用いるのかは自明である。現実的に利用できる表音文字はひらがなとカタカナのみであり音を表すにはカタカナのほうが自然だと感じられるからだ。生徒が新出語の発音をカタカナで書き留めるのは、新しい音を記憶にとどめようという前向きな態度の表れであり、責めるのは筋違いである。

では英語教師の側はどうか。彼らがカタカナでは正確な発音を表せないことを知らないはずはない。それでも教師がプリントや板書でカタカナを用いるのは、英単語とその表す音がなかなか結びつけられないレベルの生徒をそれによって救おうとしているからではないだろうか。例えば sometimes という単語を見てまったく読めなかったり、「ソメティメス」と読んだりするよりは、カタカナ発音であっても「サムタイムズ」と読めたほうがまだよい、という現実的な判断だと思われる。

では発音記号による表記をなぜ使わないのか。私見では特に中学生までの初学者を教える場合、その選択肢は有効でも現実的でもない。カタカナを必要とする生徒はもともと英語学習に困難を覚えている生徒であり、通常の英文字、あるいは英文字のあつまりである単語の綴りさえ、認識や記憶に苦勞する生徒かもしれない。「b と d を間違える生徒」「p と q を間違える生徒」に関する教室現場からの報告は多いが、その段階の生徒に「bed の発音は /bed/、yet の発音は /jet/、jet の発音は /dʒet/」といった情報が助けになるだろうか。手島（2011）は、vine /vain/、vain /vein/、vein /vein/ のような表記を見た時に中学生が抱く気持ちを想像せよ、と訴える。小菅（2003，p.85）によれば「日本の中学生・高校生には原則として発音記号を教える必要がない」。さらに故若林俊輔氏は「英語教育に発音記号は（中略）不要とか無益どころか有害である」（若林，1980，p.6）と言い切っていた。現在の筆者の考えは小菅（2003）や手島（2011）と非常に近いが、もとを正せば約40年前、大学時代の恩師である若林俊輔先生の「発音記号不要論」に触れてインスパイアされたものである。

我が国の音声学の第一人者として長年にわたり辞書編纂にたずさわっていた故竹林滋氏でさえ、著書『英語のフォニックス』の中で「発音記号への反省」という見出しをたて、発音記号の「偏重」の影に「英語の綴り字がでたらめだという認識が効きすぎではないか」と警鐘を鳴らした（竹林，1981，p.6）。音声学を学ぶことではなく自らの英語発音の質を向上させることが目的であるほとんどの学習者（手島，2011，p.39）にとって、発音記号をわざわざ覚えることのメリットは全くないか、あっても非常に限定的だと考えて良いのではないか。そして多くの英語教師は、英文字の綴りにさえ苦勞している生徒にさらに発音記号を覚えさ

せることの非現実性を肌で感じているのではないか。したがって初学者に英語発音を教える際の表記手段として、発音記号は今後も選択肢にはなりえず、ひきつづきカナが利用されると考えられる。

2.3 カタカナ表記の巧拙

カタカナ表記のほうが発音記号よりも初学者に読みやすいことは間違いない。しかし一口にカタカナ表記と行っても一意に決まるものではない。例えば apple に対する表記として、[アップル] [アポー] [エァポウ] などすぐに複数想起できる。これらの表記はカタカナを用いているため日本語母語話者にとっては読みやすさはほとんど変わらないはずだが、実際に音声化したときの apple の英語音への近似性に関して [アップル] が最も劣っていることには異論はないだろう。つまり「それを見た初学者が当該英単語のもつ本来の音に可能な限り近似した発音ができること」が目的だとするならば、様々なカナ表記には合目的性の度合いに違いがあるのである。

個人的エピソードになるが、筆者の手元に『英語入門』(小川, 1946) という一冊の書籍がある。1970 年頃、小学 5 年生だった筆者が初めて購入した英語学習用図書である。カセットもまだ珍しかった時代で音声教材は付属しておらず発音については本に印刷されているカナ表記にもっぱらよかった。apple の発音は [アプ] と表記されていたので、ずっとそう信じていたのだが、ある時実際の英語音を聞き、「全然違う!」と感じたのを鮮明に覚えている。また organ には [オーガン] という表記がついているが、その脇に筆者が鉛筆で [オーアゲン] と訂正した跡が残っている。実際の音を聞き、それにより近似するよう、本のカタカナ表記を自分なりに修正したのである。

このようにカタカナ表記には巧拙がある。小菅 (2003) は出版社の異なる 6 つの英和辞典のカタカナ表記を比較した結果、「学習者が適切な発音をするための補助として、十分練られた表記とは言い難い」(p.76) という印象を持ったという。筆者も小菅にならっていくつかの語に関して以下の 5 冊の辞書を比較して同様の感想を持った。

①キッズクラウン英和・和英辞典 新装版	三省堂	2017 年
②ニューホライズン英和辞典 第 9 版	東京書籍	2020 年
③プログレッシブ小学英和・和英辞典	小学館	2019 年
④ベーシックジーニアス英和辞典 第 2 版	大修館書店	2017 年
⑤新レインボー小学英語辞典 小型版	学研プラス	2019 年

たとえば apple の表記は① [アプ] ② [あぶる] ③ [アップル] ④ [アプ] ⑤ [アップル] である(下線は当該文字がカラー印刷であることを示す)。筆者が現実の音との乖離に失望した 70 年以上前の『英語入門』(小川, 1946) の表記からほとんど変わっていない。ちなみに April は、① [エイプリル] ② [エイプリル] ③ [エイプラル] ④ [エイプリル] ⑤ [エイプリル] である。i の部分が /ə/ であり、l の部分が暗い音色であることを考えると、学習者がこれらを読んで目標音に十分近い発音ができるとは思えない。

2.4 望ましいカタカナ表記のための原則

望ましいカナ表記の条件として小菅 (2003; 2004; 2005) は以下の 4 つを挙げている。(1) そのまま読めば英語に近い音が再生できること。(2) 読みやすいこと。(3) 限界をわきまえること。(4) システムの一貫性にとらわれないこと。

(1) は自明であるが、筆者が調べた限りにおいて従来そして現在のほとんどの英和辞書等に見られる表記はこの条件に合っているとは言い難い。(2) は精密さを追求するあまり複雑すぎる表記や特殊な記号を使用するのは避けるべきだということである。この点で、「島岡式カタカナ表記」(島岡, 1994; 島岡, 2013)、「田尻式カナ発音記号」(田尻, 2010) はそれぞれ工夫を凝らしたシステムだが、予備知識なしで考案者の意図どおりに読むのは極めて難しい。(3) は厳密には「条件」ではなく、カタカナ表記に対する認識のあり方である。あくまで実際の英語音を聞いての発音練習があること前提とした補助であり、その表記

だけを見て適切な発音ができるためのものではないと考えるべきだということである。(4)はカタカナ表記で国際音標文字のような記号と音の1対1対応を実現しようとするが無理が生じやすいので、表記体系の一貫性を追求せず単語ごとに最もふさわしい表記を考えるのがよい、という意味である。小菅(2003)は、「基本的に『個別対応・無体系』の精神でよい」(p.85)とする。

筆者もこの4条件は適切なものだと考える。(1)～(3)についてはこれまでもそう考えていたが、(4)については、これまでカタカナ表記と音の一対一対応を模索しながら苦悩していたところ、今回小菅(2003)によって啓発された思いである。

2.5 ヴィスタ方式と改定ヴィスタ方式

ヴィスタ方式とは『ヴィスタ英和辞典』(若林, 1997)で採用されていた英語発音のカタカナ表記法のことである。「一般の英和辞典に用いられているカタカナ表記とは一線を画する」(小菅, 2003, p.79)のものであり、2.4で挙げた条件(1)と(2)のバランスをとることを目指したものだ。同方式の詳細は小菅(2003; 2004; 2005)に譲るが、例えば hat を [ヘア・ト]、hut を [ハ・ト] として /æ/ と /ʌ/ の区別をし、sin を [スインス]、sing を [スイン] として /n/ と /ŋ/ を区別するなどの特徴がある。ちなみに apple は [エアポォ] April は、[エイプリョ] である。

このヴィスタ方式の開発に「深く関わって」(小菅, 2003, p.79)た小菅氏が、同方式の修正案として提示したのが改定ヴィスタ方式(小菅, 2005)である。ヴィスタ方式の大筋は維持しつつ、カタカナの文字の大きさを2段階から3段階に増やす、促音の表記を [・] から [ッ] に変える、/ə:/ の表記を [アー] から [ア〜] に変える、/traɪ/ の表記を [ツラーイ] から [チュアーイ] に変えるなどの細かな修正を加えたものである。

2.6 カタカナ表記自体の限界と英文字併用の可能性

ヴィスタ方式さらに改定ヴィスタ方式は、伝統的なカナ表記に比べて、そのまま読めば目標英語音により近似した音につながりやすいことは間違いないだろう。しかしそれでも特に以下の点において限界が感じられる。(1)語末閉鎖音表記のミスリーディング性:語の最後が /p//t//k//b//d//g/ で終わる場合、両方式とも(文字の大きさは小さいにせよ)それぞれ [プ] [ト] [ク] [ブ] [ド] [グ] を用いる。とくにオ段の文字である [ト] と [ド] の使用は母音挿入を誘発する可能性が高いのではないか。(例) want [ウォント] kind [カインド] (2) /θ/ と /s/, /ð/ と /z/ の区別の放棄: sick/thick というミニマル・ペアはヴィスタ方式ではどちらも「スイ・ク」、改定ヴィスタ方式ではどちらも「セック」と表記される。ミニマル・ペアはほとんどないが、/ð/ と /z/ も表記上は区別されない。(3) /l/ と /r/ の不十分な区別: fly/fry というミニマル・ペアはどちらも [フライ] と表記される。light [ライト] と write [ウライト] のカナ表記は「円唇を促すため」(小菅, 2005, p.107)の小さな [ウ] の有無で区別されるが、そもそも日本語の [ウ] は非円唇音なので、表記上での [ウ] の存在が円唇につながるかは疑問である。

ただし急いで付け加えると、以上の3つの点はヴィスタ方式、改定ヴィスタ方式に限った話ではない。いかなる方式であろうと日本語のカナ文字のみを利用した英語発音表記のもつ根源的な限界である。日本語のカナは基本的に日本語の開音節を表記したものであり、歯摩擦音は日本語には存在せず、流音音素も日本語には種類しかないから、(1)～(3)の問題は根本的には解決不能である。

「島岡式カタカナ表記」(島岡, 1994; 島岡, 2013)では、(1)はヴィスタ方式と同様 [プ] [ト] [ク] [ブ] [ド] [グ] を用い、(2)は「サ行」「ザ行」の文字の太さを変え、(3)は /r/ の場合はヴィスタ方式同様ラ行の直前に小さな「ッ」をつけ、/l/ の場合はラ行の直前に上付き文字の「ヌ」をつけることで区別する。しかし [スイエク] [スイェク]、[プヌレインス] [プヌライド] という島岡式カタカナ表記を見て、それぞれ sick、thick、plane、pride が果たして適切に発音されるだろうか。

この「カナでは表しきれない音がある」という根本問題を、田尻(2010)は独自記号を創出して回避した。

しかしながら独自記号の場合は、発音記号の場合と同様それらと音の対応を新たに覚える負担が生じる。考案者の直接の教え子以外の学習者が田尻独特の新奇な記号を覚える気になるだろうか、という懸念もある。

この(1)英語にはカタカナでは表せない音があるが、(2)学習者になじみのない記号を使用するのは避けたい、という二律背反を解決する一方法として、本稿ではカナと英文字を混合して使用することを提案する。カタカナをある程度工夫して近似できる音はカタカナで表記し、日本語にまったく存在しないあるいは日本語の相当音とかなり音価が異なる音は英文字で表記する、ということである。これにより、「英文字で表記してあるから日本語にはない音だ」というメッセージを打ち出せる一方、発音記号と違い、中学生はもちろん小学生もアルファベット文字自体にはかなりの程度馴染みがあるので学習の負担はほとんどない。カナ文字のみによる場合よりも、読んだ時の英語音への近似性を高めることができるのではないだろうか。

2.7 筆者自身のカタカナ利用表記の変遷

私案を提示する前に筆者のカタカナ利用表記の変遷を振り返る。Shizuka (1995) はフレーズや短い文の全体的音声イメージをカタカナ表記することのリスニング能力への効果を調べるため、Stop it! を「スタベツ」、Wait a minute. を「ウェラメネツ」とするなど、リンキングを含めた単語列全体をカタカナで表したが、英文字は用いなかった。静 (1997) は一般読者向けのリスニング教材として、about を [アバオ t]、could have を [ク d ハヴ] とするなど、語末の閉鎖音に英文字を部分的に用いた。静 (2009) は英語教員読者を対象に、in it [イニツ t]、on end [オネン d] などの語末の閉鎖音だけでなく、Ann is thirteen years old. を [エアーニズ thir ティーニヤゾウ] と表記するなど日本語にない /θ ə:/ などにも英文字を使用している部分がある。静 (2015; 2016) は中学生用の教材で、「英語の発音は綴りを見ればわかる」というフォニックスの理念を前面に打ち出し、「語末の子音には英文字を使用」「日本語にない音には英文字を使用」という基本原則を明確にし、thick を [th **イ** k] these を [th **イ** z]、rip を [r **イ** p] lip を [l **イ** p] と表記している。また子音連結にも英文字を使い、cram を [kr **エ** a m] と表記した。一般英語学習者を対象とした静 (2019) も基本的にこの方針を踏襲している。ただし揺れもあり、/v/ については英文字 v を用いる場合と「ヴ」を用いる場合があった。

3 カナ／英文字混合表記システム試案

前節までの考察を踏まえ、現時点でのカナ／英文字混合表記システムを以下に提案する。すべての英語音と表記の対応を網羅することは紙幅の関係で不可能なので、日本語を母語とする英語学習者の発音習得上でとくに留意すべき音を中心に記す。

本システムでは教師の教材準備での持続可能性を重視し、フォントのサイズ調整等は原則として除外する。ただし拗音と促音などにも用いられる小さな文字はキーボード上で簡便に入力可能であるため、小さな「ァ」「ィ」「ゥ」「ェ」「ォ」(例：エァ、ウォ) は用いることとする。また、下付きの「ヌ」は、入力が非常に簡便とは言えないが MS-Word 上でリボンにボタンを配置しておけばワンタッチで入力でき、かつ語末の /n/ に関して必要性が高いので、例外的に用いることとする。語強勢は第一強勢のみ当該音節の母音(と直前の子音)に相当する文字を**ボールド体**にして示す。二重母音、長母音の場合は最初の文字のみボールド体にする。第二強勢は示さない。

3.1 子音

大原則：子音はカタカナまたは英文字で表記する。

3.1.1 子音に母音が後続する時

(1) 母音が後続する時、日本語に類似音が存在する子音はカタカナで表記する。 /p/ /b/ /t/ /d/ /k/ /g/ /s/ /z/ /n/ /h/ /m/ /j/ /w/ は、それぞれたとえ [パ] [バ] [タ] [ダ] [カ] [ガ] [サ] [ザ] [ナ] [ハ] [マ] [ヤ] [ワ] などと表記する。

・ /w/ についてははすべてカタカナではなく、/u//u:/ が後続する時は英文字を用い、[ワ][ウィ][W ッ][ウエ][ウオ] とする。

(例) want [ワン t] wish [ウィ sh] wool [W ウオ] wood [W ウ d] woman [W ウムンヌ]

・ /j/ についても /i//i:/ が後続する時は英文字を用い、[ヤ][Y イ][ユ][イエ][ヨ] とする。

(例) young [ヤン] year [Y ィーア] yesterday [イエ ス ト ヲ デ イ]

・ /z/ /dʒ/ に関しては、摩擦音である前者は [ジ]、破擦音である後者は [ヂ] を使う。

(例) measure [メ ジ ュ ア] major [メ イ チ ュ ア] visual [v イ ジ ュ オ ウ] individual [インディ v イ チ ュ オ ウ]

(2) 母音の後続する時、日本語に相当音が存在しないまたは存在しても調音法がかなり異なる子音は英文字で表記する。 /r/ /l/ /f/ /v/ /θ/ /ð/ は、英文字 R、L、f、v、th 及び準英文字 th[˚] で表記する。たとえば [R ア] [L ア] [f ア] [v ア] [th ア] [th[˚] ア] などとする。

(例) right [R アイ t] fine [f アイヌ] this [th[˚] イ s]

3.1.2 子音に母音が続かない時

(1) 母音が続かない時、母音付加を防ぐために子音は原則として英文字で表記する。

(例) bed [ベ d] pet [ペ t] love [L ア v] miss [ミ s] Smith [s ミ th]

(2) ただし英文字では目標音に到達させがたいと考えられる、/l/ /n/ /ŋ/ /z/ /dʒ/ はカタカナで表記する。

・ 暗い L は [オ] を基本として、前のカナが [オ] または [オー] の場合には [ウ] とする。

(例) tell [テオ] help [ヘオ p] tall [トウ] always [オーウエ z] almost [オーウモウ st]

・ 語末の /p/ /b/ /t/ /d/ /k/ /g/ は [ポウ] [ボウ] [トウ] [ドウ] [コウ] [ゴウ] とする。

(例) apple [エアポウ] double [ダポウ] single [スイングウ] comfortable [カン f タポウ]

・ 語末の /n/ は 「ヌ」 とする。(例) pen [ペンヌ] one [ワンヌ]

・ 語末の /ŋ/ は [ン] とする。(例) sing [スイン] writing [R アイティン]

・ 語末の /z/ は [ジ]、/dʒ/ は [ヂ] とする。(例) beige [ベイジ] image [イメヂ]

・ 母音の後の /r/ は原則として表記しないが、r 音の有無でミニマル・ペアがある場合は小さいアで表記してもよい。

(例) car [カー] far [fアー] roar [R オーア] (raw は [R オー]) court [コーア t] (caught は [コー t])

・ 語末の /ʃ/ は sh、語末の /tʃ/ は当該単語に合わせて ch または tch とする。

(例) wash [ワ sh] watch [ワ ch] catch [ケア tch]

3.1.3 子音連結

(1) 子音連結内の、後に母音の続く子音は 1.1 に、後に母音が続かない子音は 1.2 に倣う。

(例) try [tR アイ] cry [kR アイ] ground [gR アウン d] street [stR イー t]

play [pL エイ] stop [s タ p] splash [spL エア sh] quite [k ワイ t] quit [k ウイ t]

・ 非開放・側面開放・鼻腔開放の閉鎖音は当該の子音字を () に入れて示しても良い。

(例) partner [パー (t) ヌア] acknowledge [ア (k) ナ L エヂ] written [R イ (t) ヌヌ]

3.2 母音

大原則：母音はカタカナで表記する。

3.2.1 短母音

・ /æ/ は [エァ]、/ʌ/ は [ア]、/ɑ (:)/ は [ア (-)] とする。(例) hat [ヘァ t] hut [ハ t] hot [ハ t] または [ハー t] bat [ベァ t] sad [セァ d] can (強形) [ケァンヌ] candle [ケァンドウ]

3.2.2 長母音

・ 長母音は棒引きとする。(例) talk [トー k] warm [ウォー m] speak [s ピー k] hard [ハー d]

beach [ビー ch] peace [ピー s] law [L オー] または [L アー]

3.2.3 二重母音

・二重母音は [アイ] [エイ] [オイ] または [アーイ] [エーイ] [オーイ] とし、一貫性にこだわらず当該単語に最適と思われる表記を選ぶ。

(例) tight [タイ t] tide [タイ d] tie [ターイ] fate [f エイ t] fade [f エーイ d] child [チャイオ d] surprise [ス pR アイ z]

3.2.4 あいまい母音

・ /ə/ は、ウ段を中心としながら適宜他の段も用いる。(例) teacher [ティーチュア] condition [クンディ シュンヌ] privacy [pR アイ v ウスイ] success [ス k セ s] 弱形の can [クンヌ] 弱形の of [ウ v] 弱形の the [th` ウ] 弱形の must [ム s (t)]

・ /ə/ が語頭の場合は、小さい [ア] とする。(例) acquire [ア k ワイア] abandon [ア ベアンドウヌ] addition [ア デイ シュンヌ] arrive [ア R アイ v]

・ /ɜ:/ は [ウアー] とする。(例) early [ウアー L イ] fur [f ウアー] burn [ブアーヌ] first [f ウアー st] girl [グアーオ] service [スアー v エ s] perfect [プアー f エ kt]

・ /t/ と /ɜ:r/ の組み合わせの場合は、/t/ にカタカナを使わず、英文字とする ([トゥアー] が不適当なため)。(例) turn [t ウアーヌ] stir [st ウアー]

・ /h/ と /ɜ:r/ の組み合わせの場合も、/h/ にカタカナを使わず英文字とする ([ファー] が不適当なため)。(例) her [h ウアー] hurt [h ウアー t] heard [h ウアー d]

4 おわりに

本稿ではカナによる英語発音表記の利点と限界を確認した上で、その限界を超えるひとつのアプローチとしてカナ／英文字混合表記システムを提示した。この試案は (1) カナではどうしても表現しわけられない音素対立はカナ以外の文字で表すことが望ましい、(2) 発音記号と違って通常の英文字は初学者でもすでにかなりの程度馴染みがある、(3) 英文字によって子音を表記するのは綴り字を音と直接結びつけるフォニックスの理念と整合する、という3つの観点を統合した時のひとつの帰結である。あくまで教室現場での発音指導の補助としての「音の備忘メモ」試案であり、「システム」と呼んではいるが、小菅 (2003; 2004; 2005) に倣い、細部については一貫性を欠いていたり揺れがあったりしても構わないと考えるものである。

また本稿では扱えなかったが、子音で終わる語と母音で始まる語の単語境界の音声イメージは、まさに CV 構造をもつカナによる表記が最適である場合が多い。リンキング表記でのカナ利用の例については別の機会に提示したい。

謝辞

貴重な論文をご提供くださった小菅和也先生に心より御礼申し上げます。

引用文献

小川芳男 (1946) 『英語入門』旺文社。

河内山真理・有本純 (2017) 「中学校教科書ガイドにおける発音表記の扱い」『教育総合研究叢書』10, 131-140.

小菅和也 (2003) 「英語発音カタカナ表記の活用」『武蔵野英米文学』(武蔵野大学英文学会) 36, 71-87.

小菅和也 (2004) 「英語発音カタカナ表記の活用 (2) — 「ヴィスタ方式」改定の試案」『武蔵野英米文学』(武蔵野大学英文学会) 37, 75-89.

小菅和也 (2005) 「英語発音カタカナ表記の活用 (3) — 「改定ヴィスタ方式」の全体像」『武蔵野英米文学』(武蔵野大学英文学会) 38, 91-111.

- 島岡丘 (1994) 『中間言語の音声学：英語の「近似カナ表記システム」の確立と活用』筑波大学博士（言語学）学位論文．
- 島岡良衣 (2013) 『日本語で覚えるネイティブの英語発音—3週間であなたの英語が見違える島岡メソッド』（ダイヤモンド社）．
- 静哲人 (1997) 『カタカナでやさしくできるリスニング』（研究社）．
- 静哲人 (2009) 『英語授業の心・技・体』（研究社）．
- 静哲人 (2015) 「静先生の「つづりで分かる！発音道場」『エイエイ GO!』（NHK テレビテキスト）2015年4月号～2016年3月号．
- 静哲人 (2016) 「静先生の「アブクド読み発音道場」『エイエイ GO!』（NHK テレビテキスト）2016年4月号～2017年3月号．
- 静哲人 (2019) 『日本語ネイティブが苦手な英語の音とリズムの作り方がいちばんよくわかる発音の教科書』（テイエス企画）．
- 竹林滋 (1981) 『英語のフォニックス：綴り字と発音のルール』（ジャパントイムズ）．
- 田尻悟郎 (2010) 『田尻悟郎の楽しいフォニックス』（教育出版）．
- 手島良 (2011) 「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について—発音指導の現状と課題」『音声研究』15 (1) : 31-43.
- 若林俊輔 (1997) 『ヴィスタ英和辞典』（三省堂）．
- 若林俊輔 (1980) 「つづりと発音の関係の規則性」『英語教育』(大修館書店) 1980年8月号, 6-8.
- Shizuka, T. (1995) An experimental study on utilizing katakana transcription for developing learner ability to decode rapid casual speech. 『大学英語教育学会紀要』26, 95-112.